

さ
か
い

や

や

ぞ
う

堺屋弥蔵人と暮らし

第十四回企画展

—江戸時代の庶民文化—



弥蔵72歳の肖像写真（明治12年）

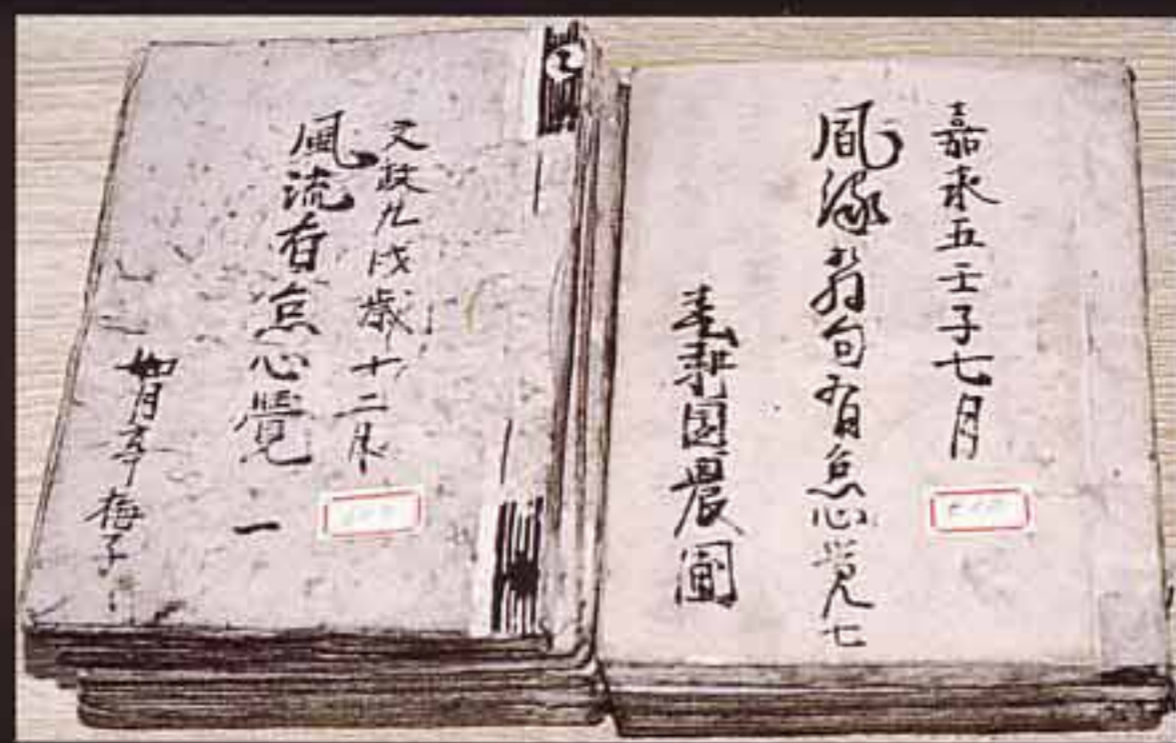
平成9年5月7日(水) ~ 8月3日(日)

休館日 毎週月曜日・毎月第3木曜日

徳島県立文書館



『千蛙集』



『風流有点心覚』



『男女教訓いけんかが見』



『手習教訓鏡』

手習い

酒井弥蔵は文化五年四月二十七日に父武助(四十五才)、母お芳(三十一才)の間に生まれた。子供の頃の弥蔵についてわかる資料はほとんど残っていないが、文政三年十三才の時「手習教訓鏡」という手習い本の写したものをきっかけに多くの写本が残っている。特に文政九年十九才の時写した写本類は、学問を志し、後の記録魔弥蔵を創り出すきっかけとなったであろう。

おかげ参り

阿波から起こったといわれる、文政十三年のおかげ参りに弥蔵が出かけたのは二十三才の時であった。この出立は「抜け参り」という言葉から連想されるような密やかなものではなく、隣近所にも断って饞別をもらったり、京・大坂の見物をしたり、帰還したとき脇町の酒井新兵衛家から「お喜び」ももらっている。どちらかといえば現在の卒業旅行のように、人生の通過儀礼としての旅のよきな要素が強かったのではないだろうか。

心学

半田村には、根心舎という阿波国に三つしかなかった心学の講舎があり、盛んな土地柄であった。学問好きの弥蔵は心学にも傾倒していったが、その到達点が「心学御題控」という記録である。この著書は、文政十一年二十一才の時から書き始め、天保九年三十一才の時に書き終えた全五巻にのぼる心学修行のための資料である。心学は、半田の大久保卯平(路友先生)から手ほどきを受け、根心舎の中心人物の一人として活躍していくことになった。

弥蔵の人格形成

俳句

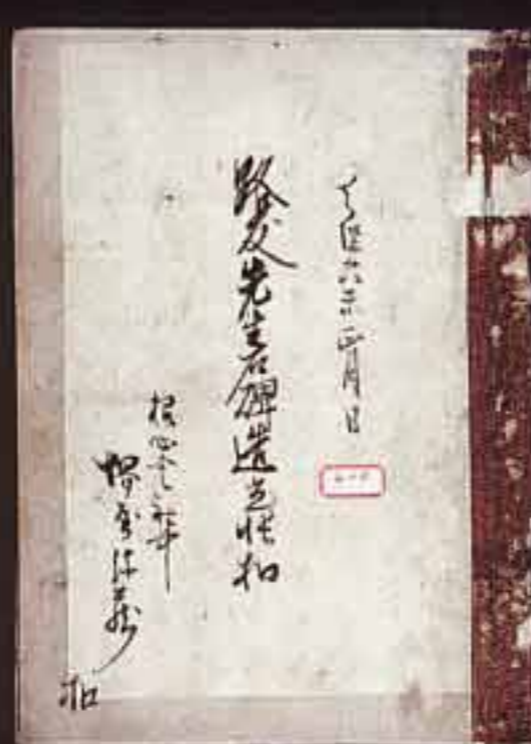
弥蔵が俳句を詠み始めたのは、祖父農人(孫助)・父梅月(武助)・伯父花山(新兵衛)らの影響によるものと思われる。弥蔵自身が自分の入選した句を集めた「風流有点心覚」によれば、文政九年十二月十九才の時から自分の入選句を記録し始める。最初の句は「餅でさへ火箸にのせる折りも無し」であるが、このころはまだ梅子(父梅月の子の意味か)の号を使っていた。実質的な活動は、翌十年四月に農圃と号を改めてからである。この年四月の序のある「千蛙集」に「提灯にしばし静まる蛙かな」の句が初めて版本に掲載されたのである。

代替わり

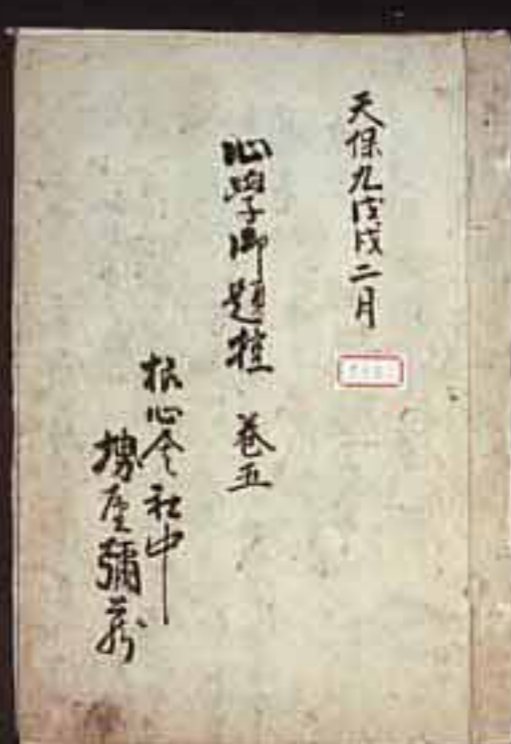
父武助は、天保六年に七十四才で死ぬ。このとき弥蔵は二十八才であった。武助は、毘沙門天に似たと書かれるような恐ろしい風貌をした人であったとされているが、若い頃から芭蕉の流れを汲む美濃派の門人となり風雅の世界に心を置く人であった。弥蔵の俳諧日誌である「俳諧雜記」に辞世の句として「我一に雪踏分ん死出の旅」があり、弥蔵の追悼句として「月花もはかなき夢や冬籠」が残っている。この父の死の後、弥蔵は法事に関する帳簿を初めとして家に関する帳簿類を丹念に付け始める。大きな人生の節目であった。



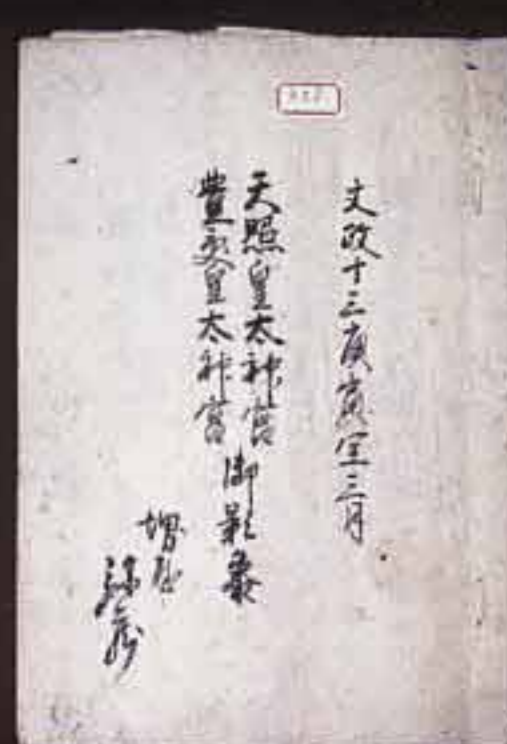
『俳諧雜記』



『路友先生石碑造立控』



『心学御題控』



『天照皇太神宮・豊受皇太神宮御影参』

いあいわし

第十四回企画展は「堺屋弥藏・人と暮らし」といたしました。この展示は本館が平成七・八年に実施した「酒井家文書総合調査」で、前年度の「江戸時代人の楽しみ」の企画展が、大変好評でありましたので、今回は酒井家文書の中心人物である堺屋（酒井）弥藏にスポットをあて、その人となりや文化人としての人柄を浮き彫りにしてみました。

酒井弥藏が生きた時代は江戸・明治の激動期であり、日本歴史の出来事を見ても、大塩平八郎の乱、天保の改革、黒船の来航、江戸幕府の滅亡、明治維新等の大変革期でありました。

酒井家は半田村（現・美馬郡半田町）の街道筋で雑貨を商い、日々の生計をやりくりする中から地域社会と深く結びついた家であります。六代目弥藏は幼少の頃から自分で写本をしながら読み書きを習い、心学講舎「根心舎」を結成し、高い教養を身につけました。その上に几帳面な性格と相まって、膨大な記録を書き残しています。また学問好きで、物事への旺盛な好奇心が文化人として成長させ、風流な俳句や狂歌を嗜み、毎年のように旅行しては克明な旅日記をつけて、人々の道しるべとしました。ただ、この旅は物見遊山ではなく、時代の変革期に激動する社会の様子を目で見、耳で聞き、肌で感じとる感性は弥藏ならではの学才であります。さらに、自分だけが遊芸を楽しむのではなく、江戸時代の地方の庶民がどのように余暇を楽しんだらよいかとして、人形浄瑠璃、人形芝居、相撲、そして村祭りまでも興行し普及させていることは特筆すべきことでもあります。この展示から地域社会に生きた一人の人物像を理解していただければ幸いです。

展示は調査委員会（委員長・四国大学教授・白井宏）の諸先生方の研究成果をもとに作成させていただきました。資料の提供や展示に協力いただきました所蔵者・酒井一字氏や半田町役場に対し心より感謝申し上げます。

平成九年五月七日

徳島県立文書館長 小 林 勝 美

堺屋弥蔵の

弘化四年 (一八四七)	四十	「出向ふ雲の花の旅日記」を記録。 阿波北方社中が施主の句集「墨直会」に農圃の名あり。「旅日記法農桜」を記録。この年からの「大福帳」が残っている。「野山名霊集」を筆写する。 先妻お文没。行年二十八才。「極楽花之旅日記」を記録。	一八四七 半田根心舎が廃絶する。
嘉永二年 (一八四九)	四十二		
嘉永三年 (一八五〇)	四十三		
嘉永四年 (一八五一)	四十四		
嘉永五年 (一八五二)	四十五		
嘉永六年 (一八五三)	四十六		
安政元年 (一八五四)	四十七		
安政二年 (一八五五)	四十八		
安政四年 (一八五七)	五十		
安政五年 (一八五八)	五十一	先祖の墓のある慈雲庵(見性寺)の歴史について「慈雲庵略縁起」を書く。協町可興社発行の「阿波」に農圃の名あり。 氏神である小野八幡神社秋祭り「八幡宮祭礼御勇(おいさみ)」を作成。 「さくら卯の花旅日記」を記録する。 母お芳没。行年八十五才。弟栄吉没。行年四十九才。 冬、養子をもらう。 二月四日養子が去る。このころ、病気をし川舟による駄賃稼ぎをやめる。 「堺屋先祖早繰系図」を作成。 「南方旅日記」を記録する。	一八五八 日米修好通商条約が調印される。
文久元年 (一八六一)	五十四		
文久三年 (一八六三)	五十六		
元治元年 (一八六四)	五十七		
慶応元年 (一八六五)	五十八		
慶応二年 (一八六六)	五十九		
慶応四年 (一八六八)	六十一	弥蔵ら正月六日より「ええじゃないか」に出発し、「お影参り諸事控帳」を記録。「豫州旅日記」を記録する。	一八六七 十二月から四年四月にかけて阿波一帯で「ええじゃないか」が大流行する。 一八六八 明治維新。
明治元年 (一八六八)	六十二		
明治三年 (一八七〇)	六十三		
明治五年 (一八七二)	六十五	「剣山大権現石道大権現参詣道中記」を記録する。 小野浜で大相撲の興行がおこなわれる。(番付表を記録する) 弥蔵夫婦、神宮寺より逆修の証を交付される。	一八七一 廃藩置県がおこなわれる。 一八七二 大小区制が布かれ半田村は、第六大区四小区となる。 一八七七 大久保兵助没。六九才。
明治十二年 (一八七九)	七十二	悦蔵(半田村大坂嘉吉の次男で利三郎の弟)が妻セキ・長女サワを帯同して弥蔵の養子になる。嘉吉の家は弥蔵宅の斜め向かいにあり、油・竹・薪の取引先であった。悦蔵は、小野浜で運送業を営んでいた。 十月五日紋付羽織袴を着用した正装で記念写真を撮影する。 三月二十一日、見性寺の先祖墓地に「光明真言二百万遍供養塔」を建立。 「七十五翁酒井弥蔵」と彫られている。	このころ弥蔵宅近くの四つ橋界限最も繁栄する。
明治二十年 (一八八七)	七十八	「奉納十里拾箇所遍路同行二人」願主酒井弥蔵の資料あり。	一八八八 市町村制が公布。半田村できる。
明治二十五年 (一八九二)	八十五	旧三月三日没。行年八十五才。法号竹岸院占達寿仙居士。	一八八九 大日本帝国憲法が公布。

生涯年表

年代 (西 曆)	年令	事 項	半田村の事項・その他の事項
文化五年 (一八〇八)	一	四月二十七日、弥蔵・父武助(四十五才)、母お芳(三十一才)の長男として出生する。	一八〇九 大久保兵助(敷地屋)出生。
文化七年 (一八一〇)	三	半田の心学を中心であった講舎、根心舎(こんしんしゃ)が焼失する。	一八一一 半田村に塗物問屋設置。
文化十年 (一八一三)	六	弥蔵の弟栄吉(幼名岩蔵)出生。	一八一三 大久保熊三郎(敷地屋)出生。
文化十一年 (一八一四)	七	弥蔵の祖母である四代孫助の妻お留没。(行年八十八才)	
文化十三年 (一八一六)	九	弥蔵の妹お朝出生。	
文政三年 (一八二〇)	十三	「手習教訓鏡」を写す。	
文政五年 (一八二二)	十五	「商売往来」を写す。	一八一九 那賀郡仁宇谷で一揆おこる。
文政六年 (一八二三)	十六	「四姓雑名控」を写す。	
文政八年 (一八二五)	十八	手島先生作「妙薬いろは歌」購入。	一八三五 異国船打ち払い令を布告する。
文政九年 (一八二六)	十九	「古状集」「島原状」「今川状」「寺子教訓書」「男女教訓いけんかが見」などを写す。	
文政十年 (一八二七)	二十	四月「梅子」の号を「農圃」に改める。井尻 臥林庵編の句集「千蛙集(せんあしゅう)」、井尻(いのしり)連発行の俳誌「阿波」に農圃の名あり。(投稿か)	
文政十一年 (一八二八)	二十一	井尻連発行の俳誌「阿波」にふたたび農圃の名あり。「心学御題控」巻一を書き上げる。	
文政十二年 (一八二九)	二十二	「心学御題控」巻二を書き上げる。	
文政十三年 (一八三〇)	二十三	弥蔵ら伊勢神宮に「おかげ参り」に行き、それに関する記録を残す。	一八三〇 このころ伊勢おかげまいり大流行する。
天保元年 (一八三〇)	二十三	井尻連発行の俳誌「阿波」にふたたび農圃の名あり。	一八三一 弥蔵の心学の師大久保(敷地屋)宇平(路友先生)没。
天保二年 (一八三一)	二十四	「心学御題控」巻三を書き上げ、その中で自らの心学の系譜について書き上げる。	
天保三年 (一八三二)	二十五	この年から「年々種蒔植物覚帳」を記録し始める。(嘉永四年までの十九年間)	
天保五年 (一八三四)	二十七	俳諧日記である「俳諧雑記」(巻一、巻二)を付け始める。 「俳諧年行事」(巻四、巻十二)へ続き、明治二十二年十二月までつづく。	一八三三 この年より諸国で飢饉、各地で一揆・打ちこわしがおこる。 このころ大久保(敷地屋)長兵衛商業用のそうめん製造を始める。
天保六年 (一八三五)	二十八	五代堺屋武助(弥蔵の父)没。行年七十四才。臨終書などに詳しい記録が残る。 堺屋系図書かれる。阿波平生社の句集「七種供 完」に農圃の名あり。	一八三七 大塩平八郎の乱おこる。
天保九年 (一八三八)	三十一	八月二十七日隣村重清村藤田氏息女と結婚。弥蔵「心学御題控」巻五(完結)を書き上げる。	
天保十一年 (一八四〇)	三十三	亡父武助の石塔(墓)を慈雲庵(見性寺)境内に建立する。	
天保十二年 (一八四一)	三十四	臥林庵が没。子息渡橋による句集「散芥子集」に農圃の名あり。 「見る青葉聞く郭公旅日記」を記録。	
天保十三年 (一八四二)	三十五	妻と母の不和を理由に離婚。	一八四一 年末から翌年正月にかけて美馬・三好郡一帯で上郡一揆がおこる。この年から天保の改革始まる。
天保十四年 (一八四三)	三十六	小野峠に、句友志道とともに芭蕉句碑を建立。その記念句会を記録した句集「雲雀集(ひばりしゅう)」が発行。弥蔵も中心人物の一人であった。	
弘化元年 (一八四四)	三十七	妹お朝没。行年二十九才。	
弘化二年 (一八四五)	三十八	「弘化二年乙巳春中旅日記」を記録。	

弥蔵の生活と楽しみ

旅

芭蕉を師と仰いだ弥蔵は旅を好み、農業・商業などの厳しい労働の合間に思い切った旅に出て数多くの「旅行記」を残している。旅の理由は、寺社への参拝のことが多い。「仏生会卯の花衣旅日記」の冒頭では、「盟友の誰彼を誘い合わせるも更に行く人なし、一休和尚に曰く独り生きて独り死ぬる身ぞと悟れとの言葉に随い仏生会の日を出立と定め」と書いて、独り旅でも辞さないことを宣言している。さらに「極楽花の旅日記」では出立に際して「我庭の花を見捨てて旅出かな」と詠んだうえに、「実に黄泉の旅出に同じ如此極楽に赴く心地して」と書いて旅先を極楽になぞらえている。

こうした旅は、仕事にも結びついていった。葉の仕入れや入れ替えなどを行っていた弥蔵や、舟による運送業に携わっていた弥蔵の顔も見えかくれする。「見る青葉聞く郭公旅日記」では、伊豫の石鎚山に参詣した帰りに金加羅寺という寺に寄って、葉を四十包買っている。頼まれて買ったのか仕事として買ったのかは定かでないが、葉屋の顔である。

「見る青葉聞く郭公旅日記」
「極楽花の旅日記」
「仏生会卯の花衣旅日記」



「大相撲番付」



芝居・相撲見物と祭り

旅とともに楽しみとしていたのは、芝居・相撲などの地方興行や祭りであった。父武助が集めた芝居番付けなどのコレクションを見れば、大坂まで出かけて初演の芝居を見物するほど芝居好きであったことがわかる。その子弥蔵も、阿波の西部で行われる狂言・芝居・人形浄瑠璃を見歩いていた。半田での興行は当然のこと重清・貞光・郡里・脇町遠くは琴平まで足を延ばしていた。こうした芝居興行に対して「おもしろき事して見せる桜茶屋年賀の春の長き楽しみ」などとよい芝居に対しては興行主である時桜茶屋の前田友吉をほめる狂歌を詠んだりして楽しんでいる。

相撲興行では、大坂まで見物に出かけていた弥蔵であるが、明治五年六十五才の時に半田村小野浜で開かれた大相撲興行については番付表を手書きで残している。この興行の差配は、半田奥山出身の湊由良右衛門(元江戸関脇雲早山鉄之助)で故郷に錦を飾る興行であった。

酒井家の氏神である小野八幡宮には、神輿の巡幸が一週間も続くというという熱狂的な祭りである「お勇み」という行事がある。弥蔵は安政五年五十一才の時この行事を記録した。弥蔵の記録によればこの行事は弥蔵の生まれる五年前の文化元年に生まれた行事であるとしている。江戸時代の後期は庶民も豊かな文化を享受できる時代であり、現代につながる地方での楽しみが生まれた時代であった。

「八幡宮祭礼御勇」



家族と信心

仕事を支え楽しみを分かち合った弥蔵の家族たちであった。弥蔵は家族を旅に同行させたりするなど大切に扱っていた様子が伺われる。

弥蔵は生涯三度の結婚をした。最初の結婚の時「尚幾代替らぬ契月の友」という句を詠んでいるが、翌年七月六日には妻と母の不和が原因で妻を親里に帰らせることになり「七夕や我は今宵を独寝る」と詠んでいる。二度目の妻はお文といひ弘化三年二月に迎えたときに「七夕の夢覚えけり花の春」と詠んでいる。しかしこの妻は五年後二十八才の若さで亡くなってしまった。嘉永六年二月四十六才の弥蔵を迎えた三度目の妻はお台といひそのとき「時を得て今相生や松の花」と詠んでいる。

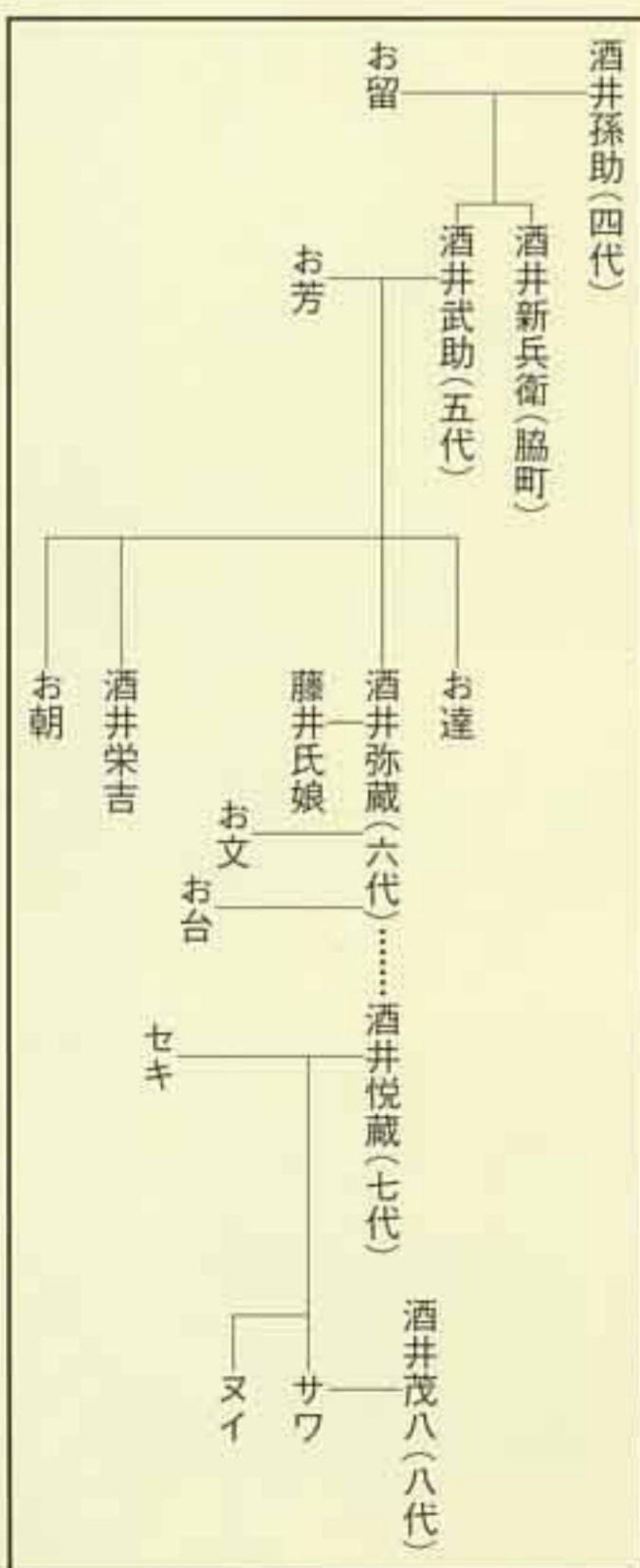
弥蔵は残念ながら子がなかったため、明治十二年七十二才の時に悦蔵を養子として迎えた。妻セキは娘サワを連れてさらに一年後にはヌイが生まれた。酒井の家もいっぺんにぎやかになったことだろう。

こうして家族を歌に詠み込むとともに、亡くなった先祖に対して手厚い法事をおこなっている。それらの法事は、全て帳簿にかかったお布施等の費用・香料・料理の献立などが記録されている。料理の献立を見ると魚などは入っていないが、二日に渡って本膳は一汁三菜の豪華なもので、近所の人が料理方を勤めていたことがわかる。

法事帳

天保七年十一月武助一周忌の献立	
二十日 夕飯 汁スキ	大根・豆腐
夜食 小豆粥	小皿 ニシメ
三十日 朝 茶・牡丹餅	小皿 砂糖
本膳飯 汁 豆腐・葉	平 牛蒡・焼豆腐・大根
血 酢アエ	猪口 蒟蒻白アエ
料理方 馬之助	

酒井弥蔵の家族



弥蔵の生業

農業

農圃という弥蔵の俳号からして、弥蔵は農民としての意識が強かった。その農民としての記録が天保三年九月父武助七十一才、子弥蔵二十五才よりつけられ始めた「年々種蒔植物覚」である。この記録の書き始めには、鋤と升の絵とともに「忘れなよ木こり草取耕して夜る繩なへと言いし教へを」という歌が書かれており、農人と号した祖父孫助から代々伝えられた農民としての教えを感じる事ができる。その後嘉永五年からは帳が改められるが、記録の書き始めには記されており教えを継承していこうという意識を知ることができる。

実際にどのような農作物を栽培していたかと言えば、藍・煙草・桑・大根・茄子など、三十種類を越える作物を確認することができ、栽培面積からそれらの多くが商品作物として作られていた可能性がある。半田の土地は狭く多くの土地が

小野にあった弥蔵の畑は度々吉野川の洪水にさらされたようであるが、多数の品種を植えることによって危険を分散し、多角的な農業経営をおこなっていたことに驚かされる。

商業

農業を生業の主として考える弥蔵であったが、商業の発達した半田という土地柄や、吉野川に面し川港にも近くかなりの繁華地であった四つ橋界隈にあった家の立地、脇町にも新兵衛伯父がいるなど商業のつながりなどから、商業は切り放すことのできないものである。弥蔵自身も多くの資料に堺屋という商家の屋号を使用している。

これら商業活動の記録が嘉永三年四十三才から明治四年六十四才まで欠なく残されている「大福帳」である。この資料によれば、船による運賃収入・半田の大商人敷地屋などに雇われての出張代行業をおこなっていたことがわかる。船による運賃収入については、元治元年弥蔵五十七才の時に病気を患いその後無くなっている。出張代行業の多くは、薬屋として、富山の薬売りのように薬の入れ替えや仕入れなどをおこなっ

ていたようである。旅好きの弥蔵らしい活動と言えるのではなかろうか。

易業

酒井家文書には、天明期から明治にかけてまで大量の暦や易学に関する本が残されている。これらは誰がどのようにして集めたかを知ることにはできないが、弥蔵が易・占いによって半田村の中や周辺の村々で信者とも呼べるような人々がいなかったことは書簡などで明かである。最初は収入になることはなかったようであるが、「大福帳」のなかには、元治年間頃より易による収入が書かれており、この時期から易業が弥蔵のひとつの生業となっていたのであろう。その後薬売りの活動などとともに易者の仕事の範囲も広がっていったようで、明治期には大量の書簡が残っている。活動範囲はそれらの書簡などから見ると新築の建物の家相を中心に、待ち人・失せもの・その年の運勢・男女の相性などを見ていたようである。読書好きの合理主義者と見える弥蔵のもう一つの顔である。

「年々種蒔植物覚」



「地券」



「大福帳」



「薬広告」



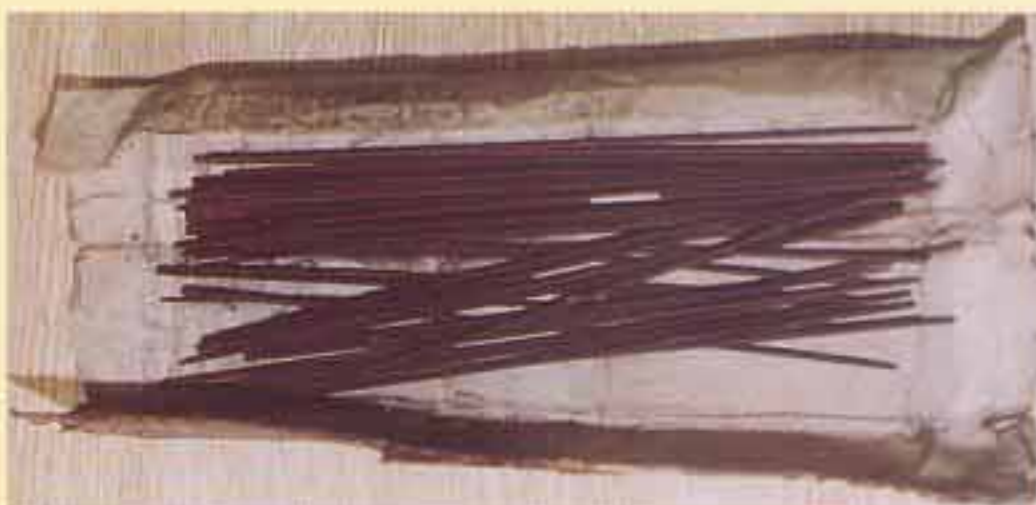
「暦」



「易に関する書簡」



「笹竹」





展示資料目録

表 題	年 代	資料番号
弥蔵の足跡		
酒井弥蔵肖像写真 矢たて 著 書 蜂須賀齊昌の梳	明治12年(1879) 不詳 文政3年(1820)~ 明治19年(1886) 明治5年(1872)(購入)	物1J-2-3 物1画2-23
学問・心学		
手習教訓書 商売往来 男女教訓いけんかが見 心学御題控(五冊) 路友先生石碑造立控	文政3年(1820) 文政5年(1822) 文政9年(1826) 文政11年(1828)~ 弘化3年(1846)	物101438 物101417 物101429 物100038, 00145~00148 物100150
俳句・狂歌		
冠上発句集 風流有点心覚 俳諧雑記 千蛙集	天保4年(1833)~ 文政9年(1826)~ 天保5年(1834)~ 文政11年(1828)	物100900~00909 物100931~00940 物100963~00974 物100153
祭り・相撲・芝居		
八幡宮祭礼御勇 相撲番付 座元蛭子屋忠太夫	安政5年(1858) 天保2年(1831) 嘉永3年(1850)	物100266 物101547 物100142
商業・農業		
年々種蒔植物覚 大福帳 曆	嘉永5年(1852) 弘化2年(1845)~ 天明年間~明治前期	物100275 物1A-1~ 物100852他

編集・発行 徳島県立文書館

〒770 徳島市八万町向寺山
電話 ○八八六(六八)三七〇〇

印刷 原田印刷出版株式会社

〒770 徳島市西大工町四ノ五
電話 ○八八六(三三)三三五六